■ 2022.7.25　No247

脱原発情報

発行　双葉地方原発反対同盟　責任者　石丸小四郎
970 － 8026　いわき市平童子町３－６　Ⅱ 903
TEL・FAX　0246-25-7737　携帯　090-4477-1641
E -mil：ishimaru19430106@gmail. com　ブログ「石丸日記」

原発事故 株主代表訴訟
東電旧経営陣に13兆円の賠償命ずる！

東電第一原発事故をめぐり東電株主 48 人が旧経営陣（勝俣恒久・清水正孝・武黒一郎・武藤栄・小森明生５氏）に対する「津波対策を怠り会社に損害を与えた」として賠償するよう求めた判決が 13 日、東京地裁（資料１）であった。判決は「安全対策を軽視する姿勢に警鐘を鳴らした」ものであった。

会社側に全責任を負わせる司法判断 確立！

「原発事故株主訴訟判決骨子」(1) は下の通りである。

原発事故の責任追及をめぐる様々な裁判が起きる中、国の責任を否定し、東電・会社側に全責任を負わせる司法判断が確立しつつあることも示した。

（資料１）　東京裁判所

巨額の賠償を命じられた４人の内、３名は業務上過失致死傷で強制起訴され、東京地裁で一審（2019 年 9 月）では無罪とされている。

刑事、民事の違いはあるにせよ…。
①地震予測長期評価の信頼性②津波の予見可能性③安全対策が適切だったか？の争点は共通する。

しかも、両事件に関わる弁護士被災者も多く、株主側の弁護団は刑事裁判で使われた多数の証拠を入手し民事の審理に提出した。更に、地震調査研究推進本部で長期評価にかかわった地震学者や証人を招き長期評価の信頼性や事故の回避可能性を主張してきた。

安易な気持ちで原発は動かせない！

特に、株主代表訴訟は…
①経営判断の前提となる認識に不注意による誤りがある。
②意思決定の過程や内容が著しく不合理であった。

この２要素を満たされなければ経営者の責任は認定されず勝訴の見通しは簡単ではなかった。ところが、それが勝訴したのだ！

来年１月には強制起訴裁判の控訴審判決が控える。この日の判決は「原子力事業者は最新の知見に基づき過酷事故を万が一にも防止すべき社会的、公益的義務がある」と強調した。電力会社経営者は「安易な思いで原発を動かす事など出来ない！」と指摘した点に最大の価値があった。

(1)　原発事故 株主訴訟　判決骨子

- 原子力事業者には事故を万が一にも防ぐ社会的責任があった。
- 国の地震予測「長期評価」には信頼性があり、巨大津波は予見できた。
- 武藤栄氏は津波対策を不合理に先送りし、武黒一郎氏はそれを是認した。
- 勝俣恒久氏、清水正孝氏は武藤氏らの判断が妥当だったかの確認を怠った。
- 小森明生氏の常務就任は 2010 年だったため除外。
- 東電の損害は約 13 兆３千億円、内訳は①廃炉約１兆６千億円②被害者への賠償約７兆１千億円③除染、中間貯蔵対策が約４兆６千億円である。　以上

株主代表訴訟とは

取締役らの違法行為や経営判断の誤りで会社が被った損害について、会社が責任を追及しない場合、株主が代わりに賠償を求める訴訟。賠償金は原告の株主ではなく会社に支払われる。役員個人の責任を問う仕組みを通じて会社の不正を抑制する狙いがある。

地震による原子炉格納容器の現状は…
１・３号機 格納容器 水位低下 水が漏れている！

第 99 ～ 100 回の特定原子力施設監視・評価検討会（2）は昨年２月 13 日、福島県沖M 7.3、震度６強（既報 No243 詳報）の地震と、今年５月 22 日、同沖M 6.0、震度５弱（既報 No245 詳報）の第一原発の耐震影響について検討を行って来ているが、その現状を伝えたい。

“水が漏れている”は明らか…対策を急げ！

連続する地震によって 1・３号機の格納容器水位低下、貯留タンクのズレ、廃棄物を保管するコンテナの転倒の現象が続いている。今回、この地震により施設、設備などの影響について、東電が点検・調査した内容を検討する場だった。

・**規制庁～**（資料２）のように１・３号機は格納容器の水位が緩やかに低下傾向にある。３月 22 日から水中ロボットを用い水位の計測を行った。地震発生直後は約 20 ㌢／日に低下。その後、同 30 ㌢／日に低下している。特に、去年から緩やかな低下傾向を示し５月 31 日からは約 30 ㌢／日に拡大している。これは開口部が大きくなったものと推測される。これは地震の影響と考えて良いのでは？そうした場合、出来るだけ水位を下げて原子炉格納容器の圧力を下げる必要がある。これを、どう考えているか？

・**東電～**３号機については、６月 14 日から注水停止試験を実施し、原子炉格納容器（RPV）の水位低下を確認している。今後検討して参りたい。

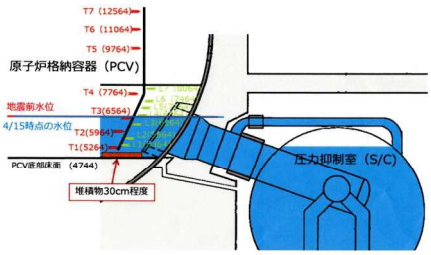
・**規制庁～**「今後、検討する」が毎回のように出ている。時間の経過と共に漏洩は広がっていると見なければならない。水位管理もふくめて、今後どうするのか？を…そろそろ対策を取らなければならないのではないか？

・**東電～**今後検討して行きたい。

・**規制庁～**３号機の水位については早く下げる必要がある。我々も、この場で再三申し上げている。

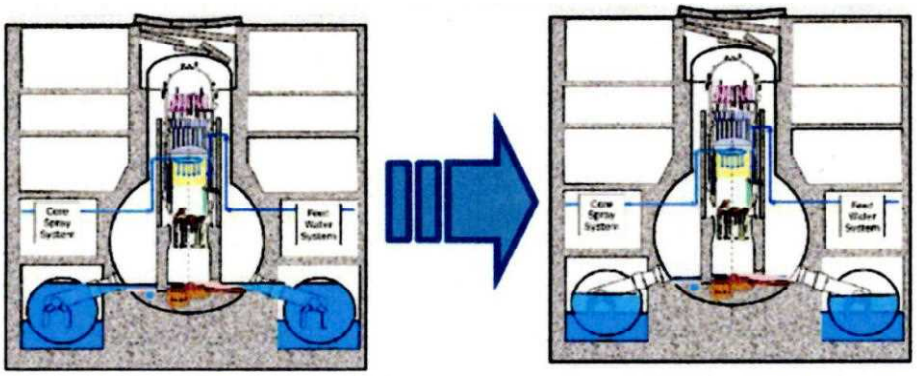
地震の大きな揺れにより破滅的影響が心配…！

しかし、東電からは「むやみに下げる訳にはいかない。十分に調査しながら慎重に進めていかなければならない」と毎回、同様の言葉を聞いている。しかも、下がり方が明らかに変わってきている。…にも関わらず、尚変わらないのであろうか？これを見て、再検討か、計画のペースを早めるという対処は考えないのだろうか？



（資料２）損傷カ所と思われる場所

・**東電～**水位低下は注水量を減らしても緩やかであると言うのが前提である。一方、指摘されてきた水位低下があることも確認出来た。今後（資料３）のように対策を十分吟味しながら本格的に水位低下に対処するという方針としたい。



（資料３）水が一杯入ったところに地震の揺れは破滅的な状況になることが心配

・**規制庁～**<u>我々が最も心配しているのは、水が大量にサプレッションプールまで入り込みダプダプになって、ズーッと置いておくことが、最も心配である。そこに地震の大きな揺れが加わった時、破滅的な状況を招くのではないか…とそう言う懸念を持っている。是非考えて欲しい！</u>

(2)　特定原子力施設監視・評価検討会

原子力災害を発生した施設に対し応急な安全対策を講じさせる「原子力施設」に指定（2012 年 11 月 30 日・原子力規制委員会が指定）し、有識者、関係自治体、一般の意見をリスク低減に向け対策を取る「検討会」を指す。

ペデスタル内は鉄筋露出 堆積物が下部に堆積！

（資料4）は 22 ﾒｰﾄﾙのペネトレーション（以下ペネ）から水中ロボットを入れ内部情報を伝えている。前号２頁で示されていた原子炉格納容器を支える「ペデスタル」の損傷状況は一層拡大していた事が分かった。

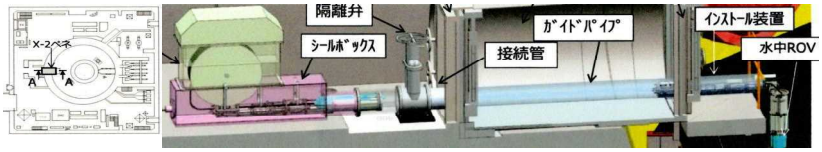
デブリ 堆積物 コンクリートは何処へ！

（資料５）を見て欲しい。

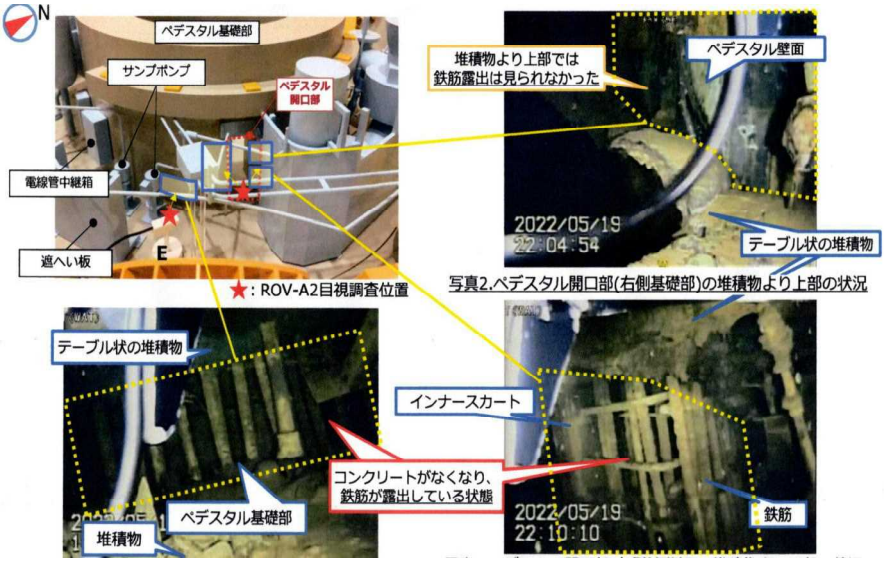
左上写真は「ペデスタル基礎部分」で「遮へい板」の内部を示したものである。写真横上では「堆積物より上部では鉄筋露出は見られなかった」とある。更に「テーブル状の堆積物」が広がっていることが分かる。

下左右写真では「ペデスタル基礎部分」のコンクリートが跡形もなく鉄骨だけがむき出しになっている。

（資料６）の写真では原子炉格納容器の底部には「当該堆積物の壁面は確認することが出来なかった」とある。



（資料４）　ペネから差し込んだ22ﾒｰﾄﾙの水中ロボットで内部を調査



（資料５）　鉄骨だけが見えてコンクリートは見られない

同検討会の議論では興味深い議論が行われていた。

・**規制庁～**アルファー放射体の塊のようなデブリが溶けコンクリートを巻き込んでテーブル状の高さにあった。これは炉心から出たもので、この高さにあったデブリが何処に行ったのか？かなりの堆積があったはずである。格納容器の底部にあるサブレッションプールに流れフワフワした物で沈殿しているように思える。これからのデブリ取り出しや廃炉に重大な問題となろう！

（資料６）　デブリと思われる堆積物が落下して見えなくなっている

「検討、検討」が多過ぎて時間だけが…

・**東電～**今後、検討して行きたい。

・**規制庁～**私は素人だが…コンクリートが溶けて鉄筋が見える…何故なのか？の疑問である。

・**東電～**コンクリートが溶ける温度は一般的には 1,200 ℃である。鉄筋は 1,500 ℃である。コンクリートは意外と水分を多く含んでいて温度が上がると水分が飛び、弱くなる機械的劣化が進んでいる事もあり得る。この事象は、これまで実験結果と明らかな違いが出ている。

・**規制庁～**原子炉格納容器の支持機能が崩壊してダストが外に出ることが最も怖い事である。そう考えると負圧管理（注１）に移るべきと考えるが、その可能性について東電として検討して欲しい

・**東電～**検討していく所存である。

「検討、検討」が多過ぎ時間だけが経つて行く！

再開後 第67回 東電交渉
海洋放出設備工事が進んでいる事に抗議する！

再開後 67 回の東電交渉が 7 月 14 日の 13 時から、いわき市で行われた。前回（5 月 12 日）の申し入れた案件により行われた。

「約束を遵守する」と言いながら守らず！

・東電担当者の一部交代に当たって自己紹介を行う。

申し入れ質問

記

1．海洋放出設備工事の６月着工について「関係者の理解なしにはいかなる処分も行わない」との文書約束を守り、海洋放出設備工事は中止すること。

2．放出水の情報公開について、トリチウムと放射性炭素のほか核種の毒性化学物質を測定し、種類、濃度、総量、期間など、すべの情報を公開すること。

3．希釈放出設備などの健全性、安全性について自然現象や誤操作による設備の損傷や機能喪失で環境放出や漏洩が起きた時の安全対策を明らかにすること。

4．海洋処分の説明会の開催について、県民・市民を対象に説明会を開催すること。

5．汚染水対策について、地下水の止水、トリチウム分離技術の実用化、大型タンク長期保管案、モルタル固化保管案の検討など、汚染水の抜本的対策を早期に確立すること。　以上

（回答）

１．について

（東電）～当社としては 2015 年の漁業関係者の皆様との約束を遵守することの方針には変わりはない。今後、関係者を含む関係者の皆様に処理水の海洋放出に係る説明を尽くし、意見を得ながら安全確保を大前提に海洋放出に向けて、より良い設備と運営方法を目指して行きたい。尚、当社は 2021 年４月に決定した政府の基本方針を踏まえ、同８月に設備設計や運用等の検討状況を示す予定である。基本設計がまったことから同年 12 月に原子力規制委員会に申請し、現在その審査を受けているところである。

（諸団体）～陸地側の工事が始まっている。海側の工事の準備が始まっている。我々としては容認できないので改めて抗議する。「関係者の理解なしには」…と言いながら工事は進めている。自分たちの方針を押しつける意味なのか？どういう状況が関係者の理解の意味なのか！

東電の回答は“支離滅裂”

（東電）～様々な人たちがいるので一概にこうだとは言えない。

（諸団体）～漁業者の理解を得たのか？漁業者は「流しても良い！」と言ったのか？

（東電）～皆様に理解していただけるよう努めるだけである。

（諸団体）～理解はもらっていないと言うことだね！「関係者の理解なしには…」と言いながら何でやるのか？

（東電）～色々やっているのは環境整備…と言うことである。出来る範囲でやっている。本格工事は…。（聞き取れない）事前工事は復元できるので、それを行っている。

（諸団体）～「全漁連からは理解を得ていない」と言いながら工事は進めている。言ってることと、やっていることの違いが在り過ぎる。事前工事は漁業者の理解を得てやっているのか？それでも工事をやってしまったのか？無理矢理やっているのか！意見は聞くけれど…聞くだけだ！に等しい。

（東電）～（黙して語らず）

（諸団体）～改めて言う。（既報Ｎｏ 245 の２～３頁の文書を読む）経済産業大臣代理は公印を押し、廣瀬社長も会社実印を使い「トリチウムを含む水について分離技術の実証試験が行われており、関係者の理解なしには、いかなる処分も行わず、多核種除去設備で処理した水は発電所敷地内のタンクに貯蔵します」と記している。これは曖昧模糊ではなく、より具体的に記されている。それを分かっているのか？

（東電）～（黙して語らず）

（諸団体）～私たちは何度でも言う。約束を守れと…。

２．について

（東電）～分析結果がまとまり次第、ＨＰに掲載予定である。詳細にはついては今後検討したい。

（諸団体）～去年 10 月 14 日、再開後 62 回交渉の中で「ALPS 多核種除去設備の二次処理性能試験状況について」（既報 No238、4・5p）次のように指摘している。試験３タンク（1,000 ㌧×３台）を 40 ㍑で試験している。これは㍑に直すと 3,000,000 ㍑を 40 ㍑で行ったに等しい。「75,000 分の１」である。その結果「信頼指数（試験信頼度）」は①サンプルの数は多いほど正確である②サンプルは母集団を代表していること③データはランダム（無作為）抽出したもの④試験者は根拠の説明責任を行う必要がある。この説明を東電は全く行っていない。だから“まがい物”に等しいと言っているのだ！責任者に改めて伝えて欲しい。

（東電）～伝える。しかし、放出する場合は ALPS 多核種除去設備で再度やる方針である。

（諸団体）～設備利用率や障害あり出来ない！

３．について

（東電）～当該施設は 2021 年９月８日原子力規制委員会で示された耐震設計についての考え方を踏まえ、安全機能が喪失した場合、公衆への実効線量は１㎛ Sv 未満であることから耐震Ｃクラスと位置付けられている。地震や規模や耐震性よっては損傷を免れないと考えている。設備全体の運転停止期間を最小限すべく早期に復旧できるよう設計を行っている。ALPS 処理水の放出は微量と評価している。

（諸団体）～規制庁は先月の特定原子力施設評価検討会のなかで原子炉格納容器の支持機能が崩壊して、ダスト放出が最も怖いと想定し「負圧管理」に移るべきと考えているが、これをどう思うか？

（東電）～次回にして欲しい。

４．について

（東電）～第一原発に視察を兼ねた座談会や県安全確保県民会議など様々な機会を捉えて説明してきた。今後共あらゆる機会をとらえ説明したい。

（諸団体）～あらゆる機会…は何年も求めて来ている。多くの皆さんが直接疑問に思うことを是非説明して欲しい。東電本社前で「きれいな海を残して欲しい！」の声に「きれいな海を残すことに努力はするが方針を変えることは約束できない」と言う。私たちの声が伝わっているとは思えない。

（東電）～これ以上、私がここで方針を出す事はできないので…。

（諸団体）～７月中に規制委員会の会合を開く予定と言う。無理無理やって事故を起こす可能性もあるだあろう。秋にみんなの声を聞いて欲しい。

（東電）～上部に伝えたい。

５．について

（東電）～「汚染源を取り除く、汚染源に水を近づけない、漏らさない」の３つの方針に沿って汚染水対策を進めている。地下水の止水については各種のご意見を聞きながら検討している。トリチウムの分離技術については、実用化のレベルに達したものがない。今後検証して行きたい。

（大型タンクは割愛する）

（諸団体）～最も多い建屋は何処か？

（東電）～３号機建屋である。

６、その他の質問

・東電の「汚染水放出シミュレーション」について

（諸団体）～脱原発情報 No244 について

（東電）～専門家に検討願っている。福島沖の海流は南からの黒潮と、北からの親潮が混じり合うため流れが非常に複雑である。２～３日おきに南北流れの向きが入れ替わっている。示している図は１年間の平均値を示したもの。これを日ごとの分布で見るとかなり変化している。その様子は「当社 HP 動画」で公開しているので見て欲しい。

（諸団体）～当方が指摘する問題と合致しているではないか？これは福島県だけに風評被害を押しつける内容だ。改めて抗議する！

・汚染水白濁問題と東電社員のアンケート結果

（諸団体）～この２つは回答を得ていない。特に 2020 年社員が 71 名増員されたが「今の仕事にやり甲斐を感じるか？」の質問に 32 %が「やり甲斐を感じない」と回答している。それは何故か？

（東電）～次回にして欲しい。　　以上

次回　9 月 12 日　13 時 00 分～

双葉地方原発反対同盟 結成50周年記念集会にむけて

斉藤章一

6 月 23 日双葉地方原発反対同盟結成 50 周年記念集会の準備会がいわき市労働福祉会館で開催された。2011 年の原発震災を経て、この 50 年の闘いを振り返り原発ゼロを実現する出発点としたい。

（資料８）政府のやり方は今も昔も変わらない。福島第一原発の「原発公開ヒヤリング」を開催したが、発言者、内容ともに建設を進めるためのプロパガンダであった。これに対して社会党・福島県労働組合協議会・反原発市民団体は全県集会を開催し福島市内をデモ行進した。写真の左側には物々しい機動隊がデモ隊と対峙している。

（資料8）1972年9月　ゴマ化しの「原発公開ヒヤリング」に反対し福島市内でデモ行進

第 1 原発の営業運転開始は 1971 年 3 月であったが、事故が多発、原発を造った米国ゼネラル・エレクトリック（以下 GE）とは「ターン・キー」契約で、技術面はすべてＧＥお任せであったから、当時東電は「お猿の運転手」と揶揄された。設備利用率は 1977 年度には 9.2 %でほとんど修理に明け暮れていた。作業に従事する労働者の被ばく線量は増える一方で後に白血病などの業務災害認定闘争につながっていく。原発は常に労働者の犠牲の下にある。

（資料9）1978年双葉体育館　住民の生活と健康をおびやかす原発建設に反対する県民総決起集会

（資料10）意気軒昂　200号記念集会に集まった人たち

岩本忠夫氏は原発反対同盟の初代委員長である。1967 年の県議選に出馬したが落選、次回 1971 年に見事当選を果たした。県議会で原発の不都合な事実を暴露したため、岩本氏は四方八方からの攻撃を受ける。1975 年の選挙では得票を増やしながらも落選。1979 年には大事件が起きる。県議選直前の 3 月、米国スリーマイル島原発でメルトダウン事故が発生した。「絶対起きない原子炉重大事故」が本家米国で起きた事に政府・東電、住民も震撼した。当然住民も目を覚ましてくれるだろうという私たちの期待に反して、大きく得票を減らし落選。　この頃になると住民の生活は原発に依存し運命共同体となってしまった。1986 年のチェルノブイリの事故でさえ同様で私たちの士気も落ちた。

しかしチェルノブイリの被害の全容が明らかになる中で「核と人間は共存できない」ことが確信に変わったことも事実である。

2011 年ついに未曾有の原発震災事故が発生する。私たちは生活どころか先祖代々守ってきた土地も集落の絆も家庭も失ってしまった。

この大事故を経ても原発立地自治体の多くは再稼働を要望している。「原発再稼働は金そのもの」と見て取れる。今政府は電力危機を演出している。でも私たちは決して未来を諦めるわけにはいかない。結成 50 周年記念集会は「原発ゼロ」への起爆材である！

出典　文献

・（資料１）編集部・（資料２～６）東京電力ＨＤ・国際廃炉研究開発機構 IRID・（資料７）東京電力ＨＤ・（資料 8 ～ 9）福島県社会党の 35 年・（資料 10）編集部　・（注１）核燃料物質を扱う管理施設では常に外より低い圧力にして空気の流れを外に漏らさないシステムになっている。